



# あなたの夢はなんですか

「先生、昨日のクッキーがものすごくおいしかったから、お母さんやお父さんにも一口ずつあげたよ。」

昨日の Venture fourth でお伝えした北海道土産のクッキー「札幌農学校」。それを家に持って帰った子たちは、それを私の想像以上に大切に味わってくれたようです。

冒頭に書いたように、一枚のクッキーを分け合って大切に食べたという報告を、今朝何人もの子たちが私の所に伝えに来ました。

もちろん、私からは特に何かを伝えたくありません。

「割れやすいクッキーだから気を付けて持って帰ってね」と伝えただけです。

そうやって持って帰ったクッキーを、誰かと分け合って食べる姿に、今日は朝から爽やかな感動を覚えたのでした。

書きながら、第1クォーターの道徳授業で伝えた話を思い出しました。

確か、4月のころだったと思います。

みんなで道徳の教科書教材を読んでいるときに、ふと目に留まった内容から話が盛り上がり、こんな話につながったことがありました。

それは、池間哲郎さんという方の本の話です。

本は、次のように始まります。

かつてフィリピンの首都マニラのトンド地区に、スモーキーマウンテンという場所がありました。ここは首都の広大なゴミ捨て場。一日中ダンプカーでゴミが運び込まれ、ここに捨てられていきます。積み重ねられたごみは自

然発火して、いつも煙が上がっています。だから「煙の山」、スモーキーマウンテンと呼ばれていたのです。

1993年の4月、このスモーキーマウンテンを初めて訪れました。あたり一面、目も開けられないほどの煙が立ちこめ、吐き気をもよおす悪臭がただよっていました。私はカメラを抱えて走り回り、ゴミを拾う人々のすさまじいばかりの生活環境をファインダーにとらえていきました。

ビンやスクラップなどのゴミを拾って、それをリサイクル業者に売って暮らしている子どもたちがいました。中には五歳にも満たないと思われる子どももいます。手や足は真っ黒に汚れ、皮がめくれて血だらけ。それでも子どもたちは、一心不乱にゴミを拾っていました。

数人の子どもたちが遊んでいたので話を聞いてみました。全員がゴミを拾うことを毎日の仕事にしている子どもたちです。その中に一人の少女がいました。足の先から頭のとっぺんまで真っ黒に汚れ、ボロボロのTシャツを着た十歳くらいの女の子です。瞳がキラキラと輝き、かわいい笑顔が印象的でした。

私はこの子に聞いてみました。

「あなたの夢は何ですか？」

ここまでを簡単に話した後、質問の答えをみんなで予想しました。

「幸せになりたい。」

「学校の先生になりたい。」

「お医者さんになりたい。」

「学校に通って勉強をしたい。」

「お金持ちになりたい。」

発表が出尽くした後、本の続きを紹介しました。

少女はニコニコしながら答えました。

「私の夢は大人になるまで生きることです。」

この答えを聞いて、グッと胸にきました。笑顔だったから、よけいにこたえました。大人になるまで生きるなんて当然のことだ、とっていました。そんな当たり前のことが夢だと聞いて、愕然（がくぜん）としてしまったのです。

振り返ってみれば、三十代後半までの私の人生は中途半端なものでした。

真剣に生きたことなど一度も無い。努力を重ねて物事を達成したこともない。すべてに適当に生きていました。そんな私にとって、ゴミ捨て場の子どもたちとの出会いは、それまでの生き方を全て破壊するぐらいの衝撃でした。

彼らが必死で生きている姿を見て涙が止まらなくなり、ゴミの中で人目もはばからず大声で泣いてしまいました。ぶざまな人生を歩んできた自分が恥ずかしくなったのです。

同時に「今まで何をしていたのだ」と怒りとも思える感情がわき上がり、「真剣に生きなければ」と心の底から思いました。小さな子どもたちがゴミの中で必死に生きているのに、大の大人の自分が一生懸命生きていない。それは子どもたちに対して失礼だと感じました。そして、アジアの貧しい子どもたちと一生付き合っていくことを自分に誓ったのです。

話を聞いたみんなは、啞然としていました。

そうした状況がすぐ近くのアジアであることを知って、さらに驚いていました。

本のタイトルは、このことをそのまま言語化しています。

『あなたの夢はなんですか？私の夢は大人になるまで生きることです。』

著作には、次のことも書いてありました。

子どもたちは、夜明けとともに働きます。朝の5時、6時から一日10時間近く働くのが当たり前だそうです。しかし、それほど必死に働いても、もらえるお金は日本円で50円程度でしかありません。こういう子どもたちが生き延びるのはとても難しいことです。満足な食事をとることができないため、ほとんどの子どもは栄養失調の状態です。

ゴミ捨て場の世界で、子どもたちが15歳まで生きる確率は、三人に一人と言われていています。残念なことですが、それが現実です。しょうがないのです。それほど劣悪な環境の中に暮らしているのです。「生きたい、生きたい」と願っても、大人になるまで生き延びることが困難な子どもたちがいます。「大人になるまで生きる」という、私たちにとっては当たり前のことが当たり前ではない子どもたちが同じアジアにたくさんいるのです。このことをどうかわかってほしいと思います。

本当に厳しい現実です。

でも、子どもたちは少なからずこうした状況を知っているようでした。

頷き、食い入るように話を聞いています。

関連して、本の一節をもう一つだけ紹介しました。

ある日、ゴミ捨て場に暮らしている子どもたちを連れてピクニックに行きました。もちろん、弁当は私のおごりです。その中身は彼らが今までに食べたことのないほどのごちそうでした。

昼食の時間がやってきて、弁当のフタを開けて中身を見た子どもたちは「キ ャーキャー」と声を出して喜びました。うれしさのあまりピョンピョンと飛び跳ねている子どももいます。

状況を見かねた池間さん。

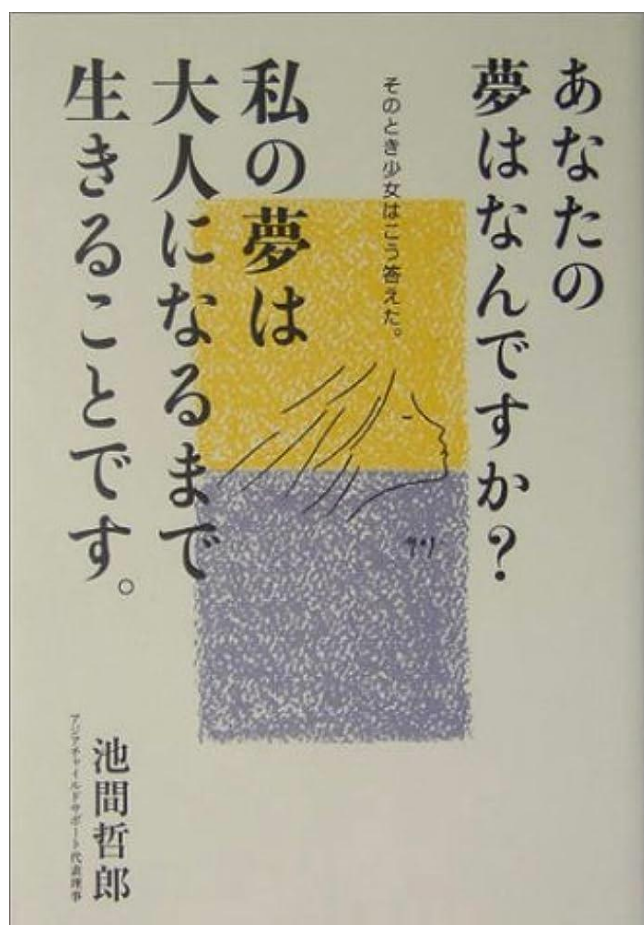
その子たちに少しでも楽しい時間を、との思いでピクニックに連れて行った時の話です。

私はこの話を、本だけでなく直接の講演会でも聞きました。

さて、みなさん想像してみてください。

お弁当を開けた後、子どもたちはどんな様子で食べたと思いますか。

夢中で食べた？大喜びで食べた？泣きながら食べた？



次のページを読む前に、一度考えてみてください。

本には、次のように書いてありました。

しばらくして「サアーお昼を食べよう」と言うと、意外なことが起きました。全員が弁当のフタを閉じて、食べてくれないのです。どうしてなのか、私にはわけがわかりませんでした。

黙って様子を見ていると、六歳ぐらいの少女が私の前にやってきました。そして、今にも泣きそうな顔で「おじさんにお願いがあります」と言うのです。「なんですか？」と聞くと、少女は私にこう言いました。

「こんなごちそうを私だけで食べることはできません。お家に持って帰って、お父さん、お母さんと一緒に食べていいですか？」

びっくりしました。お腹が空いているだろうに我慢をして、お父さんお母さんにもごちそうを食べさせたいと言うのです。結局、誰も一口も食べずに弁当を持って帰ることになりました。

フィリピンだけではなくありません。モンゴル、カンボジアなどのアジアの各地の貧しい地域で、同じようなことを経験しました。心の奥底から親を思う子どもたちとたくさん出会い、そのたびに、なぜこれほどまでに親を思えるのかと考えさせられました。

私にも幼い頃に似たような記憶があります。父親が結婚式に招待されると、出された折り詰め弁当に手をつけずに持ち帰ってきました。その弁当を家族みんなで大事に食べました。あの時のおいしさは今でも忘れる事ができません。

われわれは豊かな社会を作りました。物がありあまり、毎日の食事に困ることもありません。しかし、人を愛する心、家族の絆、生きる力など、人間として大切にしなければならないことを忘れがちになっているのではないのでしょうか？豊かさを否定するつもりはありませんが、失ってしまったものの大きさについても考えてみる必要があるのではないのでしょうか？

アジアの子どもたちを見て、そんなことを思いました。

クラスみんなは、絶句していました。

この本との出会いは、私にとっても大きなきっかけの一つでした。

読んだのは、教師になって一年目の時です。

あまりの衝撃に思わず数冊を買って、知人に贈りました。

色んな方に口伝えで紹介もしました。

でも、これはほんの少しの動きにしかありません。

私の仕事は、教師です。

授業を通じて、教育を通じて、こうしたことについて教室で子どもたちに伝えていくことが本筋だとも思いました。

そこで、実際に行くことにしました。

チャンスを得たのは10年前。

JICA のテストに運よく受かり、カンボジアに行かせてもらうことができました。

そこでのお話は…、長くなるのでまた折に触れて紹介します。

こうしたことについて学ぶ勉強のことを、国際理解教育（または開発教育）と言います。

グローバル化がますます進展していく世の中において、世界の人とどのようにつながり、どのような社会を作っていくかと言うことは、これからますます必要性を高めてくる分野でもあります。

今後はプロジェクト学習を中心として、海外の国々のみなさんとも交流をしながら勉強を進めていく予定です。

その準備を進める上でも、ぜひ日本以外の国にも目を向けて、色々と情報を集める練習をしておくといいでしょう。

ニュースを見ること。

新聞を読むこと。

お家の人に話を聞いてみること。

図書館で本を読むこと。

どんな方法でもよいので、ぜひ情報に対するアンテナを高くし、世界の出来事に目を向けていってほしいと思っています。

と、このお話が浮かんできたのは、みんなの姿があったからです。

一枚のクッキーを分け合う姿もそうだし、先日行った日間賀島で一杯の水に感動しながら飲んでいた姿もそうです。

こうした素敵な心根がたくさん見えるようになってきていることも、私にとっての大きな喜びです。

☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

